指定討論１
帰国子女と外国人子弟の言語教育

学習言語としての日本語教育

上野　日本語教育に携わっているものは第一言語とそれから大きくは第二言語、その中をまた細かく分けますと、定住者のように一生日本語を使っていく人たちの第二言語と、一時的に日本に滞在して日本語を学ぶ、主としてその学習言語は英語で行うというような外国語としての学習という、こういうような分け方をしています。大変短い時間ですので、国語教育との接点ということから考えますと、学習言語としての日本語教育というところに今は焦点を当てて話をしたいと思います。

子どもの言語習得

今泉さんもおっしゃったことですけれども、生活言語と学習言語というのは大きく違います。生活言語というのは話しことば中心でありまして、必要なコミュニケーションができる、そういった能力が中心です。学習言語というのはその言語を使って更に大きな教科を学んでいく、そういった道具となる言語で、これはどうしても書きことば中心となります。これは初中等教育全部を見ていきますと、上になればなるほど書きことばのパーセンテージは高くなるということはいうまでもないことだと思います。先ほどのコメントでおっしゃいましたけれども、コミュニケーションはあまり問題なくできる、これは言語習得期がだいたい９歳、10 歳頃で臨界期がきますけれども、これまでに日本に在住し十分な音声情報を得ますと、そしてまた友だちがありますと、友だちから日本語を学ぶといったようなことで、普通のコミュニケーションには事足りる、という状況になるわけですけれども、それから先の学習言語を身につけるところが大きなハードルだということを聞いております。それをどういうふうにするかということが長期の展望に立って解決しなければならない問題ではないかと思います。

ちょうど中学校までいた、高等学校までいた、という中国にいらした方の場合に安心感を持つとおっしゃったのは、そういった、つまり言語を身につける仕組みを既に身につけているか、あるいはその途上で日本語にぶつかって両方ともがあいまいになってしまうのか、といったところが分かれ目ではないかと思います。これは何も外国人とか第二言語習得者という場合だけではなくて、第一言語習得における障害者の場合にも９歳、10 歳が壁と言われているところでありまして、特に聴覚障害の場合にはここまでに読みを覚えなければその先に言語の広がりがないと言われているところからも、９歳、10 歳の臨界期というのは非常に重要な時期であると思われます。そして特に読みに入らなければ先が広がらない、ということは同じようにその第二言語習得者も読解の能力を身につける段階に入っていく、そのステージがスムーズにいかないことにはそれから先の高等教育につながるステップを順に追っていくことは非常に難しいのではないかと思われます。こういったところが、いわゆる第一言語として、日本語を無意識のうちに習得してきた人たちの中でも読みに興味を持たない子というのは、読みに非常に興味を持っている子とは大変な違いが出てくるものと思われます。具体的に私は教育の場を知りませんけれども、やはり、沢山読む子はそれだけ世界が

広がっているのではないかと思います。
　帰国子女の場合、これは日本人の両親を持っておりますけれども、滞在期間の長短、いつ、どの年齢で外地に在住したか、どのくらい在住したかによってはほとんど外国人子弟と変わらないような人もいれば、あるいは、日本にいた人とあまり変わらない、あるいは宙ぶらりんというような場合もあります。第一言語習得がしっかりしないで、外国語に接して、そして手当がない場合には外国語も宙ぶらりんに習得するというような、こういった帰国子女のケースも見られます。
言語習得を考えます時には学習者の心理ということを無視してはできませんで、例えば今朝ほど理解について「同じ」と「等しい」というようなことの違いを学習者がどう受けとめるかということについてお話がありましたけれども、理解の仕組みがどういうふうになっているかということ、これには個別性がありますけれども、同時に共通性もあるわけです。そういった実際に学習に携わっている当事者の心理内容をもう少し研究してかかる必要があるのではないかと思います。

読解能力の重要性

　それから読解能力が非常に重要な言語能力のベースだということは国語教育でも大部分がこれに費やされていることからも分かります。しかし、これは聴解能力、口頭表現能力というものを前提としております。私たちが本を読むときには無意識に頭の中で音声をたどっているということを伺いましても分かるわけで、第二言語教育、外国語教育の場合には当然４つの能力、聴解能力、口頭表現能力、そういった音声言語を大変重要視して、そしてその後で読解能力、読みの方に入るわけですけれども、そういった点は逆に国語教育は自然の学習に放置されるところがあって、それが日本人の表現能力が貧しい、と最近言われているところではないかと思うのです。国語教育には日本語教育の中での聴解能力、実際に理解と表出の仕組みの中に使われる仕組みという共通の点もあるのですけれども、異なる仕組みを使っているというようなことも心理学の中では明らかにされております。しかし、理解するということは既に持っている知識の枠組みを取り出して、そして推論を使って理解するということで、決して一字一句を理解しているのではないというようなことがあります。ですからそういった学習者の頭の中の仕組みを実際に教える方が知っていて、実際の教室活動を行うということが大変重要ではないかと思います。言語の４技能はそれぞれ重要でありますが、高等教育へいくには、やはり、読解能力を無視できないというのが、第二言語の場合にも、母語の場合でもあります。

聴解能力、口頭表現能力の土台作りを

　母語の場合には聴覚障害、視覚障害という２つの障害が問題となります。視覚障害の場合には音声言語の問題はほとんどないのですが、これは９歳、10 歳ぐらいまでに点字を沢山読む練習をしないとその上の広がりがない、と言われております。聴覚障害児も９歳、10 歳のところで読むということに移らなければ広がりがないといわれています。それと同じようなことが、やはり第二言語習得の場合にも考えられることだと思われます。そのためには第二言語習得の場合には聴解能力、口頭表現能力の土台をきちんと作る。それなくしてはインプットが非常に限られてしまいますから、読解能力には及びません。ですから、第一言語教育ではあまり力点を置かれない部分をきちんとおさえて、更に読解能力をつける、あるいは書字表現能力をつけるというところにいかなければいけ

ないのではないかと思います。